

2022. 7. 31 (日) 使徒2:42~47

2:42 彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。

2:43 すべての人に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議としるしが行われていた。

2:44 信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、

2:45 財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。

2:46 そして、毎日心の一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、

2:47 神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださった。

<説教>

およそ2000年前の五旬節（ペンテコステ）の日、三千人ほどの人々がイエスの使徒たちとそのほかの弟子たちの仲間に加えられ、初代教会の一員となりました。その人々は聖霊に満たされた使徒ペテロの説教を聞いて心を刺され、ペテロの勧めを受け入れ、それに従いました。彼らは「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受け」、「この曲がった時代から救われ」ました。彼らはそれまでは「この曲がった時代」と同じ信仰、同じ考えと形の生活をしていました。つまり〈この世と調子を合わせて〉生きていましたが今やこの世の人々の間で生きながらも、この世の人々とは違う信仰生活、教会生活に入りました。それまでとは変わった、新しい信仰と考えと行動の生活に入ったのです。その姿が42節にまとめて記されています。そしてそのまとめて言われたことが43～47節で改めてもう少し詳しく説明されています。

42節でまず〈彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた。〉とされています。〈使徒たちの教え〉とはどんな内容だったのでしょうか。イエスはかつて「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」と使徒たちに言われました（マタイ28:20）。ですから、〈使徒たちの教え〉と言ってもそれは当然のことながら使徒たちが勝手に考え出したことではなく、それは「イエスの教え」だったに違いありません。イスカリオテのユダの代わりにマツヤが使徒に加えられたときの条件も、「イエスが使徒ペテロたちと一緒に生活しておられた間、ヨハネのバプテスマから始まって使徒たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも使徒たちと行動をともにした人の一人」で「イエスの復活の証人」となるべき人だったということでした（使徒1章）。またイエスは「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのこと思い起こさせてくださいます。」とされました（ヨハネ14:26）。それらのことから、〈使徒たちの教え〉とはどこまでも「イエスの教え」でした。後に使徒パウロは「もし、この手紙に書いた私たちのことばに従わない者がいれば、そのような人には注意を払い、交際しないようにしなさい。」（Ⅱテサロニケ3:14）と語っています。この〈私たちのことば〉というのが〈使徒たちの教え〉と同じことと言えるでしょう。しかし〈私たちのことば〉と言っても、やはりそれはパウロが勝手に考えたことではなく、どこまでもイエスの教え、みこ

とばとみわざに基づいたもの、イエスの教え、みことばとみわざに叶ったものであることも間違いありません。続く 43 節に〈すべての人に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議とするしが行われていた。〉とあります。この〈すべての人〉とは、このとき新しく教会の仲間に加えられた人々はもちろんのこと、47 節で〈民全体〉と言われている、その時はまだ仲間に加えられていない教会外の人々の両方を含んでいると思われます。〈使徒たちによって多くの不思議とするしが行われていた〉のは、〈使徒たち〉自身の何か神憑（かみがか）った力を示すためのものではありません。先にペテロは説教の中で「神はナザレ人イエスによって、あなたがたの中で力あるわざと不思議とするしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。それは、あなたがた自身がご承知のことです。」と言いました (22)。そのように、〈使徒たちによって多くの不思議とするしが行われていた〉のは、あのイエスが復活して今も生きておられ、聖霊によって〈使徒たち〉とともにおられ、イエスが〈多くの不思議とするし〉を行っておられるのだということを〈使徒たち〉が証ししていたということにほかなりません。

〈交わりを持ち〉の〈交わり〉(コイノーニア)とは「共有、共通」という意味の言葉です。〈信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。〉(44,45)ことはまさにこの〈交わり〉でした。また、先に〈彼らはずっと、使徒たちの教えを守り〉とありますが、そこには〈使徒たち〉が語り〈教え〉、それを聞くという〈彼ら〉と〈使徒たち〉互いの「交流」がありましたから、それも〈交わり〉の一つとも言えるでしょう。更に〈彼ら〉が〈使徒たちの教えを守〉ったということは、〈使徒たち〉が「これはイエスの教えだ、イエスの教えに叶う、守るべき大事なことだ」と語り教えたことを〈彼ら〉もまた「アーメン、その通りです。従います。」と同意して守ったということになります。ですから、〈教え〉が〈使徒たち〉と〈彼ら〉の間で大事なことだという「共通」の認識があり、大事な教えを「共有」したという意味でそこにも〈交わり〉がありました。

〈パンを裂く〉とは今で言う聖餐式、主の晩餐のことです。もちろんそれもイエスの教えに従って行ったことでした。当時は〈家々で〉いわば「家の教会」にも集まり、聖晩餐を行い、〈喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し〉(46,47)ていたのです。

〈祈り〉にはそれまでのユダヤ人としての祈りに加えて、イエスが教えてくださった祈りが捧げられたに違いありません。そして〈毎日心一つにして宮に集ま〉(46)ったのも何よりも〈祈り〉のためでした(cf.3:1)。〈家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美〉する中にも当然〈祈り〉があつたに違いありません。そして〈宮〉であれ、〈家々〉であれ、〈祈り〉、また〈家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美〉すること即ち一つ所に集まり、神を礼拝することもまた〈交わり〉でもあります。

このように、〈いつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた〉初代教会は〈民全体から好意を持たれていた〉と同時に〈すべての人に恐れが生じ〉るような存在だったのです。そういう教会に〈主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださいました〉のです。毎日の教会の働きにせよ、週日の祈禱会にせよ、主日の礼拝にせよ、そこでかしらとしてお働きになり、それらを支配なさり、人々を信じさせ、悔い改めさせ、新しい生活に入れてくださるのは、主イエス・キリストなのです。

